

2020年10月25日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「何事にも時がある—クロノスとカイロス」

聖書：コヘレトの言葉3：1～11

「何事にも時がある」という言葉には慰めが満ちている。私の歩みには 神の定めがある。その日、その時、喜び、悲しみの時にも、また失敗のその瞬間にも、神はあなたと共におられ、泣き笑いし、苦しみ、喜んでおられたことを教えている。今、この時も神が共にいることを教えているゆえに慰めが満ちるのである。

「時」には二つの意味がある。一つは淡々と流れ、漠然と流れる時間の時。もう一つは点としての時、意味のあるその“時”、私にとっての大切な“時”。ギリシア語では、「時・時間」を「クロノスとカイロス」という言葉で使い分けられているが、ここの「時」は、カイロスである。生まれる時、笑う時、愛する時、泣く時、失う時・・・私たちには、「私の」時があるわけで、神は私たちのその時をカイロスとして共に居られたことを意味している。

もう一つ。この「時」は、あなたが他者の、隣人の時をどう見ているのか？ということも同時に問われている。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」(ロマ 12：15)ことが生まれているのかと。

私たち沖縄の歴史を見る時に、沖縄は他者からどのように見られ、扱われてきた時だったのか？ 日本政府の政治姿勢を見る時、お世辞にもカイロスの時とは言えない。淡々と「粛々」と流れるクロノスの時としてしか感じていないように思える。沖縄の歴史、現状に留まり、カイロスとしての時を深く感じ取っていく時、沖縄の基地問題は新たな方向へと向うはずだ。

先月から再び「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」がスタートした。この10月で8年目を迎える。この会を始める時にはとても不安があったことを思い起こす。オスプレイの強行配備、米兵による暴行事件、基地が多くあるがゆえに起きてしまう状況に、キリスト者の意思表示の場として実行したゴスペルを歌う会。始めて見れば、多くの方々が応援し、駆けつけてくださり、今、東京、横浜、福岡と全国10か所で連帯の輪が広がっている。このことは沖縄の歴史を、クロノスからカイロスへと変えられて、共に泣き、共に歩むことが生まれたということであろう。

今のこの時を、一つ一つの出会いの中から大事に向き合うことを覚えつつ、私たちに与えられた時間を大事にして行きたい。「何事にも時がある」ことを覚え、慰めと悔い改めを教えられていきたい。(神谷)